

密教の仏と山における日本の神

——空海の曼荼羅思想として——

熊 本 幸 子

はじめに

高野山は東寺とともに、真言宗の開祖である空海（七七四～八三五）が真言密教を発展させるにあたって活動の拠点とした場所である。弘仁七年（八一六）に高野山を賜りたい旨の奏上を行い、勅許を得られた空海は、弘仁一〇年（八一九）には高野山開創にとりかかり山中の地・水・火・風・空を支配する五神に対しての護身結界の法事を行った。

しかしながら、日本の山にあつては仏教が請来される以前から古来の神祇信仰の存在があつた。

空海も、高野山開創にあつては、その土地の地主神となる諸神を祀っていることから、山における神祇信仰と何らかの交渉があつたであろうことは容易に想像できるのである。空海の撰述書

に諸神の名は現れないとしても、空海を思想を考究する上において、古代の山岳信仰の存在およびその関係を軽視されるべきではないと考える。だがそうなると空海がどのようにに在来の山岳信仰と関係しつつ密教の世界観を展開させていったかが問われることとなる。

以上の点から、古代の山の宗教、とくに本稿では高野山に照準を合わせるようになるが、山における古来の神観念と密教思想の包括的理念が交錯する過程を検証しつつ、空海の曼荼羅思想が古代信仰に及ぼした影響を考察していきたいと思う。

一 仏教受容と山岳信仰

空海の山に関する神観念を考察するにあつては、当時の山岳信仰の形態がどのようなものであつたかを考慮する必要がある。

まず、思想背景となる古来の神観念と仏教との関係から見てみることにしたい。

(1) 仏教受容

『日本書紀』によると欽明天皇一三年（五五二）百済の聖明王によって三種の文物（金銅の釈迦像、幡や天蓋などの祭具、若干の經典）が献上され、仏教が伝来した。ひとびとは、在来の神々―八百万の神、すなわち多種多様な形象において顕現する神―と見慣れぬ仏とは、どちらのほうが靈力があるのかおおいに戸惑い、金色に光る釈迦仏は、「仏神」、すなわち仏という名の神とよばれた。⁽¹⁾ わが国の仏教受容にあつては、相好がきらきらした仏像はかつて見たことのない異国の神として受容されたのである。

ただし、この時代は、祖靈崇拜の時代にあつて、まだ「氏神」が仏法に先行していたのであるが、聖徳太子の時代では、「氏神」の社とともに「氏寺」が選択されるに至る。やがて仏教のもつ護国性が統一国家に依用されるようになると「氏寺」から「官寺」が成立したのであり、『金光明經』・『法華經』・『仁王經』という護国三部經に代表される經典が研究され、国家の安寧隆昌のために誦誦されるようになった。⁽²⁾ 伝来当初には、仏教をめぐる豪族間で異質の文化の接触の際におこる摩擦をみたと伝えられるが、次第に流行していき、やがて律令政治と並行して国家仏教へと発展していったのである。

こうした仏教受容の態度を概観すれば、日本古来の神と異国の

神である仏との間には葛藤を生じたように捉えられようが、実は、国津神とは、それぞれの豪族が支配している地域の守り神という程度の神であつて、日本の神と外来の仏教の神との間の戦いというようなものは顕著に見られなかったのである。

つまり、古来より尊崇された日本の神々は、地縁・血縁などで結びつた同族的な共同体の生活の安定に大きく影響を与えるものであつた。神の恵みによる豊饒と安寧を共同体にもたらすために集団的な儀礼が定期的に行われたのである。⁽³⁾ いわば一種の自然信仰であつたため、外来宗教が伝来しても積極的に排除するだけの自立性をもっていなかったと考えられる。

一方、仏教もまた土着的信仰に対して寛容な宗教であつて、その多神教的性格によって日本の神祇信仰と結びつき、変容していく要素をもっていた。

古代インドでは、あらゆる存在は唯一絶対者の顕現したものであり、したがつて、すべては根底において一体であるという「自己不二」の考え方が、あらゆる宗教や倫理の出発点になっている。仏教でも自己と他者を対立的に区別せず、インド古来の神々を取り入れていくが、その場合に、ほとんど葛藤らしい葛藤はみられない。むしろ、インド古来の神々を自らのうちに取り入れることにより、仏教の優位性を示そうとさえしているのである。⁽⁴⁾

こうして伝来した仏教は在来の原初的神祇信仰を取り入れつつ、変容し土着化していったのである。とくに、山々に囲まれ、山が

人々の精神世界と深く関わっていた日本にあっては、仏教が在来の山岳信仰にもたらした影響は大きかった。仏教受容によって山における神観念はいかなる影響を受けたのであろうか。

(2) 山岳信仰における神観念

日本の神社の典型は、古来、神社境内に、本殿を中心に各種の建造物を配置し、それをとりまく鎮守の森といわれる樹木が繁茂した自然の中に神さびて見られるものである。けれども、奈良県の大神神社や埼玉県の金嶺神社など本殿のない神社も散見されるように拝殿背後の山全体は神霊の籠もる神の森と考えられた。山は神そのものと同視され、不入の神域とされていたのである。

その一方で、人の霊は死んでから遺骸を離れて山中へ、あるいは山頂を介して天まで昇るという死後観によって生じた山中他界観も存在していた。つまり、神霊の住むこの聖域は、霊界でもあって、死霊・祖霊の休まるところと崇められていたのである。ところが仏教に触れてから、そうした死霊は成仏しきれていないとされ、「鬼」の表象にまで仕立てられていった。山は他界として悪鬼邪霊の屯する世界と考えられるようになったのである。

つまり、山が畏怖すべき悪鬼邪霊の住処であるという考え方は、仏教伝来以後盛んになるにしても、そのような考え方のルーツは伝来以前に遡る。この点に関して和歌森太郎氏も、「仏教信仰が伝わる以前の時代から、山中に畏怖すべき魔性のもの、いわゆるアラブル魂がいるとの見方があったので、仏教に触れてから、悪

しき神、荒ぶる神、そういったものに「鬼」という字を借用して当てた。」として⁽⁸⁾いる。

和歌森氏のこの言葉待つまでもなく、日本人の古い神観念には、ニギミタマとしての神霊と、アラミタマとしての神霊の二種の神があった。後者のアラブル神に対しては、これをなごめ静め、災厄となることを防ぎとどめようと呪術を行うのである。こうしたことから原初形態での山岳信仰では、山の神を畏怖し仰ぐ神信仰という側面のほかに、魂鎮めのまじないとしての呪術を行う信仰という側面もあったのである。こうして、それまでの悪霊の観念は、「鬼」と解釈され、呪術を介入させて鎮められる「負の神」となったといえよう。

二 空海の曼荼羅思想

(1) 高野山の開創と密教思想における仏

山はそうした死霊の世界、悪鬼邪霊の世界でもあったのだが、仏教にあつては、禪定を行う修行の場であつた。

弘仁七年(八二六)、空海は修禪の地に適う処として高野山を賜わりたい旨の奏上を行い、勅許を受けて、同一〇年(八二九)高野山開創のため七里結界の法を修して地鎮の式を執り行った。

その時の願文「高野建立の初の結界の時の啓白の文」には、次のようにいう。

沙門遍照金剛、敬つて十方の諸仏、両部の大曼荼羅海会の衆、

五類の諸天、および國中の天神・地祇、ならびにこの山中の地水火風・空の諸鬼等に白さく、(中略)今、上は諸仏の恩を報じて、密教を弘揚し、下は五類の天威を増して、羣生を拔濟せんがために、一ばら金剛乘秘密教によつて、両部の大曼荼羅を建立せんと欲う。仰ぎ願わくば、諸仏歡喜し、諸天擁護し、善神誓願して、この事を証誠したまえ。あらゆる東西南北・四維上下、七里の中の一切の惡鬼神等はみなわが結界を出で去れ。あらゆる一切の善神鬼等の利益あらんものは意に随つて住せよ。(傍点は筆者による。)

この願文は、十方世界のすべての諸仏、金剛界・胎藏の両部の曼荼羅の諸仏、五類天のみならず、日本國中の天地の神々および高野山中の地・水・火・風・空を支配する五神に啓白するもので、結界に住む邪惡な鬼神は排除し、仏法に利益をもたらす善鬼神はそのまま住することを願うというものである。この結界儀札によつて畏怖すべき「負の神」である惡鬼神は真言の呪法によつて鎮めおさえられて、尋常の神——利益をもたらす恩恵的存在——にならしめる。この結果、七里の結界から惡鬼神を霧散させてしまうのである。

ここで、注目すべき点は空海が真言密教の諸仏・諸神に古来の神祇信仰の対象となる神々をも包摂させていることである。なぜこれらの神々を等しく組上にあげていうのであろうか。

密教にあつては教主を法身大日如來とするが、大日如來はすべ

ての仏の頂点に君臨する仏であるとはせず、初期仏教の釈迦一仏信仰、大乘仏教の諸仏諸菩薩という考えを受け継ぎ、これらを統一する仏として捉える。すなわち、その他の諸仏諸菩薩は大日如來の徳の一部をあらわしたり、大日如來の化身だとしたりする考えである¹⁰。金剛界曼荼羅と胎藏界曼荼羅の二つに宇宙の万有を包摂させ、万有すべてが大日如來の分靈・分身とされるのである。

したがって、こうした密教教学の曼荼羅思想の立場からすれば、日本の天神地祇も高野山の神々も大日如來の顯現にはかならないのであり、啓白の願文にはそうした真言密教の世界観に基づいて日本の神々をも密教の諸仏に包摂し融合させたことになるのである。

(2) 高野山の神々と伝説

このように結界の啓白文の中で空海が密教の世界観に基づいて神仏の融合を展開させたことをみたのであるが、現実の問題においても古来高野山に祀られていた神々との融合をはかったことがみられる。

つまり、高野山には、空海の開創以前から、神奈備信仰¹¹とともに水分¹²の山神丹生津比売神の信仰―北にある天野川の水源信仰―があつた。しかもこの山の山神をまつる司靈者は狩人であつたが、この狩人の始祖が、後に神格化されて高野明神となっている。

ただし、高野山の開創伝説では、狩人がその狩場を高僧に獻じて、山岳靈場を開創させ、その狩人も神と祀られるのである。す

なわち「祀られる者」と「祀る者」が、ともに神となっている。これが丹生津比売神と高野（狩場）明神である¹³。

いずれにせよ、こうした伝説の存在は、高野山が天野村に住んでいた山神丹生津比売神を祀る山岳宗教者たちによって、贅を狩る狩場として管理されていたところに空海が入ってきたという史実を示すものである。つまり、空海が高野山を開創する以前に、古来、山には二柱の土地の神々が祀られていたのである。そこでこれら高野山の山神信仰と天野の水分信仰の結合をはかったのが、丹生津比売神と高野明神の合祀であった。高野山の中心をなす伽藍坦場の神聖なる御社山^{おんやま}には丹生津比売神と高野明神の社殿がともにならべ祀られているが、空海が高野山を切り開き、寺院を建立するのに先立ち、地主神の諸神を仏の守護神として融合させたものと考えられる。

(3) 空海と神仏習合思潮

以上のように、高野山開創にあたって行った結果の密教儀式においてにせよ、あるいは土着信仰の山神水神の合祀にせよ、空海は天神地祇を密教の諸仏に包摂させたことが理解されたが、空海のこのような立場は、東寺の境内においても引き継がれている。

空海が嵯峨天皇より密教の根本道場として賜った東寺の境内には、平城一派の人びとの怨霊の鎮魂のために空海が建てたとされる鎮守八幡宮があり、そこに安置するために空海が男神像二体と女神像一体の三所神とする僧形八幡神像を彫ったことが『東宝

記』（第三の鎮守八幡宮の条）¹⁴に見られる。これは空海の真言密教の立場からすればまさしく神と仏の一体化といえるのではないだろうか。

神と仏の関係は、仏教受容後には互いに寛容な共存関係を育み出して、空海の時代には、すでに種々の習合思潮の形態がみられるようになっていたのである。

まず中央・地方の大神に付属の神宮寺が建立され、仏像が祀られるようになる、神社では仏教の經典を奉納したり、神前で読経したりすることが盛んに行われるようになった。

その契機となったのは、神がみずからの苦悩を訴え、仏法による救済を求めるという神身離脱という思想にあった。神々は厳しい修行をして善根を積んだために六道のうちの最高位の天に生まれたのであるが、その後もさらに修行を続けて悟りを開かない限り、生死をくり返して六道をさまようのであって、神も仏法によって解脱を得ようとする願望があったとした。

これに近い類型として、『日本霊異記』¹⁵には東天竺国の大王が前世の悪業から猿となる報いをうけた猿神となり、僧に供養を願うという現報説話も見られた。神が罪の報いであるとされ、仏の優位を示すことでは同じ類型といえよう。

さらに、天平勝宝元年（七四九）聖武天皇は東大寺建立にあたって、応神天皇を主神として祀る宇佐八幡を勧請して祈願したことがみられる。仏教ではインドの神々を取り入れて仏法の守護神

としたように、日本の神々も仏法を守護するという形が展開されたのである。

こうした神仏習合思潮がみられるようになっていた時代であつて、空海は自ら木彫の僧形八幡像を作つたのである。そもそも古代人にとって木は神を宿すものであつた。この意味においても空海の僧形八幡像は、神と仏が一体化されたものとして、それまでの神仏習合思潮を一層推し進めたものとなつたと考えられるのである。

おわりに

以上から、空海は、真言密教の世界観である曼荼羅思想によつて、日本の神々を真言密教の至尊である大日如来に包摂してとらえたのであるが、それは密教の仏と日本の神の融合というよりもさらに神仏の一体化へと昇華させるものであつたことが理解される。

けれども、たとえ、理論的に密教の世界観である曼荼羅思想において万有すべてを包摂させたとしても、実際には、空海は高野山に生える一本一本の木に宿る神聖な神の存在を感得し、それに対して深い畏敬の念を感じていたのではないだろうか。『性霊集』巻第一の「山入る興」⁽¹⁶⁾には、「山神木魅（木の精）これを庵とす。」とあり、山は山の神や木の精の住処だといっている。このことから、自然にみなぎる霊威への畏敬の念は、生涯山岳修行を続け

てきた空海の思想の根底にあつたのではないかと思われるのである。

- (1) 佐藤正英『日本倫理思想史』六〇・六一頁 東京大学出版会 二〇〇三年
- (2) 堀池春峯「飛鳥・奈良時代仏教の展開」(『仏教(下)——流伝と変容』)所収 一四九頁 大阪書籍 一九八六年
- (3) 頼住光子「日本古代における「カミ」信仰と仏教受容に関する一考察——『日本霊異記』に即して——」(『淳心学報』第七号)所収 一〇四九頁 平成元年
- (4) 高木神元「密教神話の源流」(『密教の神話と伝説』)所収 大阪書籍 一九八四年
- (5) 西牟田崇生「ヤシロから神殿へ——神社境内の構造」(『神々と仏』(日本の美と文化、第四巻)三五頁 昭和五八年
- (6) 和歌森太郎「山岳信仰の起源と歴史的展開」(『山岳宗教の成立と展開』)所収二五頁 名著出版 昭和五〇年
- (7) 和歌森太郎 前掲書 一六・一七頁
- (8) 山に入り修行する修行者は、崇る山の神以上の力ある仏教の加護のもとにあつてはじめて山に入ることができると考えられ、霊験力があるものとされた。
- (9) 『弘法大師著作全集』第三巻 三九二・三九四頁 山喜房佛書林 昭和四八年
- (10) 要するに、その基本的性格は、二つの性格——絶対的な統一原理の人格化と、その無限な具象化——に尽きるといえる。
- (11) 神体山信仰。高野山の最高峰は弁天岳で紀ノ川筋から望みうる神奈備山。神奈備山は神隠ります山の意で、円錐形もしくは笠状の

美しい山の姿が神霊を宿すとされた。

(12) 「水分」は「みまくり」と読み、流水の調節や分配にあたる「水配り」を意味する。

(13) 五来 重 前掲書 二九―三三頁

(14) ただし東寺に現存している八幡三所大菩薩像はそれに当たるものではない。岡 直己『神像彫刻の研究』九〇頁 角川書店 昭和四十六年

(15) 『新日本文学大系三〇 日本霊異記』下巻第二四縁一六三・一六四頁 岩波書店 一九九六年

(16) 『弘法大師著作全集』第三巻 一二二頁

(くまもと・さちこ、日本倫理思想・仏教学、

お茶の水女子大学大学院)